

大宰府系坊跡

第 136 次 調 査

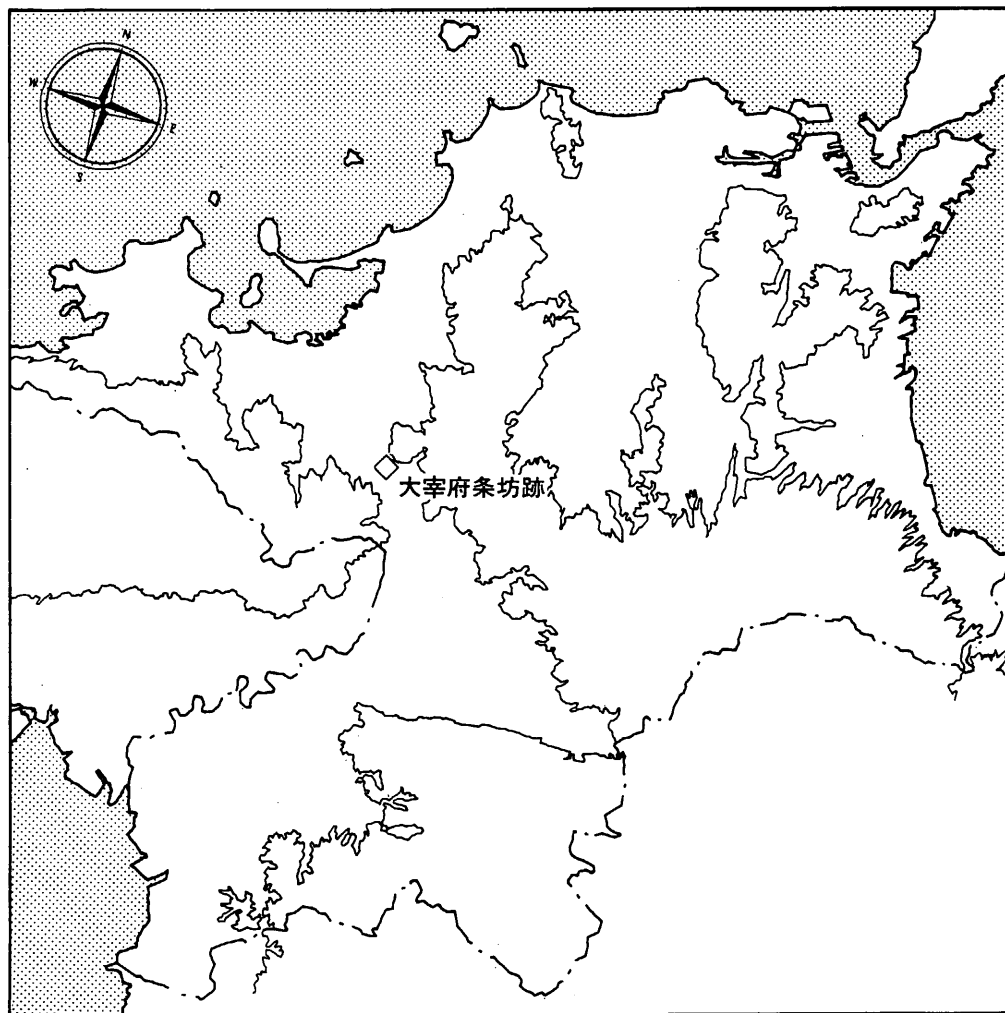
筑紫野市文化財調査報告書

第 42 集

1 9 9 4

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡



序

筑紫野市は、太古から北部九州沿岸と九州の内陸部を結ぶ交通の要衝として栄えてまいりました。

古代大宰府が、遠の朝廷、として繁栄していた頃、当市の北部は大宰府条坊域の一部として大宰府政庁と栄華盛衰をともにしていたと考えられております。

このような歴史に育まれた当市には、たくさんの遺跡があります。しかし今日的な人々の営みのなかで、大規模な開発から小規模な建築により消えていった遺跡は数多くあります。

このような先人達の残してくれた文化的遺産を保護し、後世に伝えていくことが私達の役割であり、今後とも尚一層の努力を重ねていきたいと思っております。

今回、共同住宅建築に伴い調査を行なったところ、大宰府関連の遺構が見つかったと聞いております。

本書はこの調査成果をまとめたものです。

発掘調査ならびに報告書作成にあたって、御理解、御協力をいただきました関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成6年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例 言

1. 本書は筑紫野市大字塔原510-2に所在する大宰府条坊跡の発掘調査の報告書である。
2. 今回の調査は太宰府市教育委員会・筑紫野市教育委員会が実施する一連の大宰府条坊跡調査の第136次にあたる。
3. 現地での実測、写真撮影は渡邊和子・小鹿野亮が行ない、東亜建設技術株式会社（現場代理人：白水寿一）に写真測量を、気球写真については壇空中企画に撮影を委託した。
4. 遺物の復原は山内妙子・松尾敦子が行ない、遺物の写真撮影についてはフォトハウスオカに委託した。
5. 挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
6. 挿図中の北は真北である。
7. 出土遺物の実測ならびに製図は渡邊が行なった。
8. 本書の執筆・編集は渡邊が行なった。

本文目次

	頁
I. 調査に至る経過	3
II. 位置と環境	3
III. 調査の概要	4
1. 掘立柱建物	5
2. その他の pit	10
3. 柵	12
4. 溝	12
5. その他の出土遺物	13
IV. まとめ	15

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (S 1/25,000)	1
Fig. 2	調査地点位置図 (S 1/2,500)	2
Fig. 3	SB-1 実測図 (S 1/90)	6
Fig. 4	SB-2 実測図 (S 1/90)	7
Fig. 5	SB-2 出土土器 (S 1/2・1/3)	7
Fig. 6	SB-3・4 実測図 (S 1/90)	8
Fig. 7	掘方断面図 (S 1/40)	9
Fig. 8	pit 83. 杭遺存状況実測図 (S 1/30)	10
Fig. 9	その他の pit 出土土器 (S 1/2・1/3)	11
Fig. 10	柵列実測図 (S 1/90)	12
Fig. 11	SD 出土土器実測図 (S 1/2)	13
Fig. 12	その他の出土遺物実測図 (S 1/1・1/2・1/4)	14
付図	大宰府条坊跡第136次遺構配置図 (S 1/100)	

図版目次

PL. 1	遠景・全景
PL. 2	掘立柱建物
PL. 3	足場杭及び掘方断面
PL. 4	出土遺物
PL. 5	出土遺物



- | | | | |
|-----------|------------|-------------|------------|
| 1. 調査地点 | 2. 139次調査 | 3. 塔原廃寺跡 | 4. 武蔵寺 |
| 5. 123次調査 | 6. 杉塚廃寺跡 | 7. 112次調査 | 8. 86次調査 |
| 9. 144次調査 | 10. 113次調査 | 11. 107次調査 | 12. 129次調査 |
| 13. 般若寺跡 | 14. 榎寺 | 15. 筑前国分尼寺跡 | 16. 筑前国分寺 |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1/25,000)

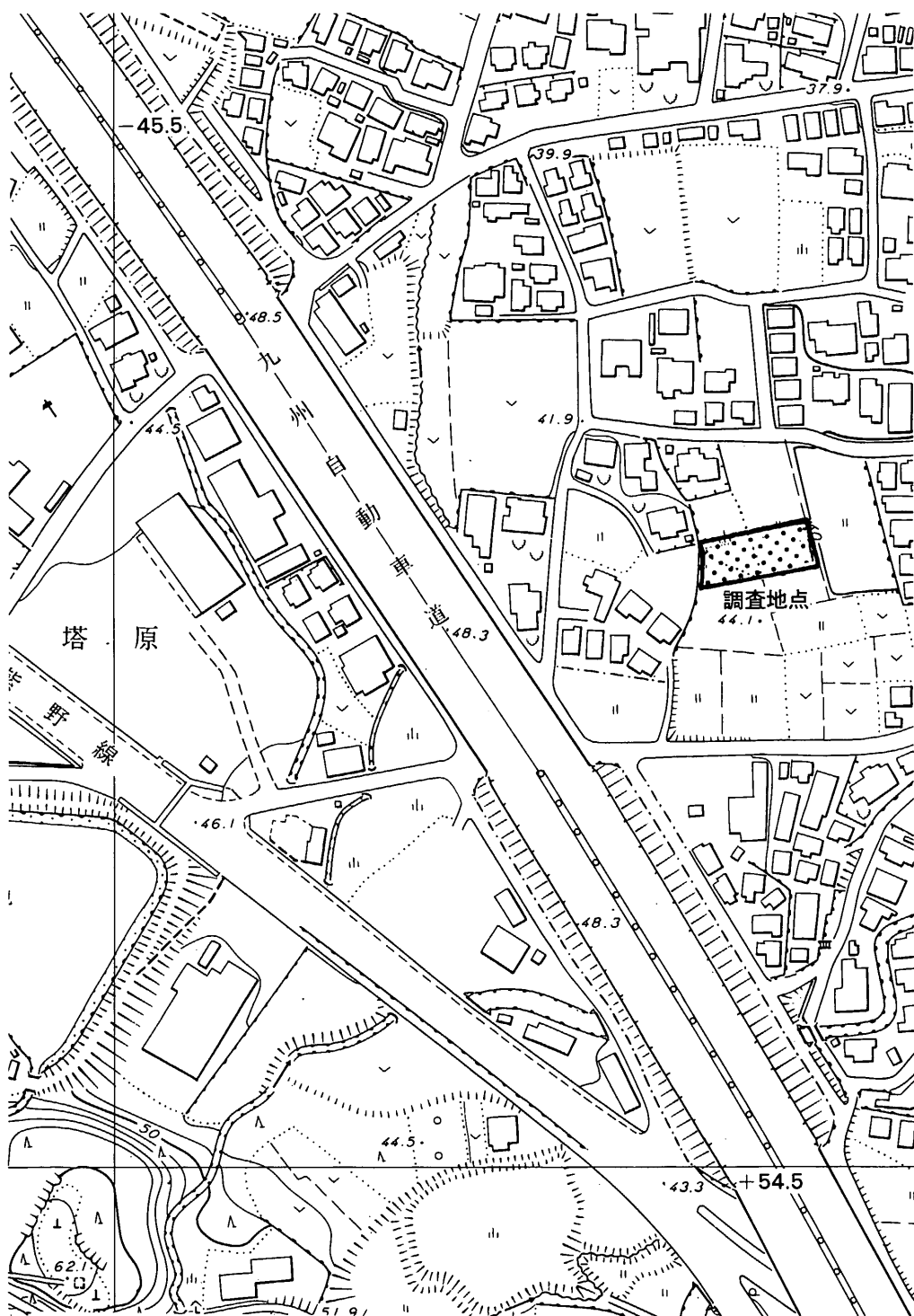


Fig. 2 調査地点位置図 (S 1/2,500)

I. 調査に至る経過

平成4年1月10日付で地権者齊田清氏より遺跡の有無についての照会があり、当該地は周知の遺跡で試掘調査による確認が必要な旨を伝え、1月25日に試掘調査を実施し、遺構の存在を確認した。同年3月25日には県教育委員会より事前に発掘調査を実施する旨の通知があり、これを申請者に伝えるとともに発掘調査の実施について協議を行ない、平成5年4月5日付で埋蔵文化財調査委託契約書を締結し、4月16日より発掘調査を開始した。

調査組織

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕正敏
庶務	筑紫野市教育委員会	教育部長	永田晋一
		社会教育課	課長 黒田未宣
		文化財担当	係長 山野洋一
		技師	渡邊和子
試掘調査		主事	奥村俊久
発掘調査		技師	渡邊和子
		技師補	小鹿野亮

II. 位置と環境 (Fig.1・2)

今回の調査地点は筑紫野市大字塔原510番地に所在し、鏡山猛氏の推定条坊域からはやや外に位置する。調査地点の所在する筑紫野市の位置や条坊域内については既に報告書等で述べられているので、ここでは省略するが調査地点の周辺部は推定郭内でもあり、数多くの歴史時代の遺跡が存在している。調査地点の西側210mの所には、現在三段割りこみの心礎を残すだけの塔原廃寺跡^{註1}があり、当地点も塔原廃寺跡関連の遺構の存在が期待された。また北西180mの所には礎石及び基壇の一部を残す杉塚廃寺跡^{註2}が位置する。同様に平成5年度併行して調査した条坊第139次^{註3}も105mに、平成2年度調査の条坊第103次^{註4}も60mの距離にある。さらに北東1.4kmの所には塔原廃寺跡との関係で注目されている般若寺跡^{註5}がある。

このほか、九州縦貫道工事に伴う発掘調査によって剣塚遺跡・塔原遺跡・唐人塚遺跡などの弥生時代や古墳時代の遺構なども検出されている。

註1 福岡県教育委員会『塔原廃寺』福岡県文化財報告書 第35集 昭和42年

註2 筑紫野市教育委員会『杉塚廃寺』筑紫野市文化財調査報告書 第4集 1979

註3 筑紫野市教育委員会『大宰府条坊跡第139次』筑紫野市文化財調査報告書 第41集

註4 筑紫野市教育委員会『大宰府条坊跡第103次』筑紫野市文化財調査報告書 第29集

註5 九州歴史資料館『般若寺跡』大宰府史跡 昭和62年度発掘調査概報別冊

Ⅲ. 調査の概要

今回の調査対象地は開発総面積の内、構造物の建てられる1000㎡の範囲に限定して調査を行った。現況の調査区は東側が西側より40～50cm程度低く、試掘調査の所見では灰黒色砂質土が地山で、この面で遺構検出がなされていたが、耕作土・床土を剥土すると、すぐに遺構の確認ができたため、灰褐色砂質土の面で遺構検出を開始した。調査区の東西のコーナー部での層序は耕作土・床土・灰褐色砂質土・灰黒色砂質土となり、段差のつくSD-1付近では灰褐色砂質土が大きく孤をえがき下がり、その上に客土を重ねて耕作面としている。これは旧地形が東側に向かって下がっているのを示唆しているものである。さらにこの層序の中で重要なことは灰褐色砂質土が整地層であり、遺構が整地層面で構築されていたことは東側の遺構の状況（深さ）から容易に推察される。また今回調査対象外にした北側の駐車場予定地の試掘での層序を見ると灰黒色砂質土（地山）の上面に客土を重ね耕作面をつくっている。土地所有者の斉田清氏から伺った話によれば、現況の田にする時に道路前の高い部分を重機で削平したとの事で、層序と一致する。さらに太宰府市教育委員会作成の昭和23年の太宰府古地形図を見ると現在の道路面で多少の段落ちがあったことが確認できた。現状の地形からと条坊第113次の調査から北側部分も東側同様にゆるく下がっていくことが明らかで、天拝山麓から派生する丘陵部は開折された小谷でいくつかに分かれ、この丘陵上に遺構の多くは遺存すると考えられる。

調査では多くのpitが検出され、しかも柱痕もよく遺存していることから、できる限り埋土や断面を図示することにし、現地だけでの確認で建物跡をまとめることに努めた。しかし昨年は例年になく雨が降り、湧水に苦労しながらの断面図作成となり、こだわった図化方法に少しは反省もしたが、土壌状の大きなpitから柱と副柱が確認できたのは建物の在り方の一端を把握する上で貴重な成果となった。

検出した主な遺構は、掘立柱建物（SB）4棟・柵（SA）1条・溝状遺構（SD）14条・土壇（SK）1・pit 677である。掘立柱建物は、机上では数棟増えるかも知れないが、現地での埋土・形状にのみ固執した結果であることを考慮していただきたい。前述した様に、土壌状の大きなpitにも固執した。条坊域の調査担当者となって各種の報告書を見るに堅穴状の遺構が整然と並んでいるにもかかわらず建物跡としてまとまるものがないことが疑問であり、ニュータウンの調査当時、弥生期の大型掘立柱建物を検出できたことが、弥生時代以降にも、このような建物が存在してもいいのではないかという、こだわりの結果、偶然とは言え主柱・副柱をもつものを検出した。多くの遺構が検出されたにもかかわらず遺物の量はきわめて少ない。しかも整地層からも細片の土器が多く、整地層の時期や遺構の時期が明確になしえるものは少数である。しかし南西隅の整地層から単弁八葉蓮華文・軒丸瓦が出土した。これは唯一の瓦であるが現段階で出土した中の最も遺存の良いものである。

1. 掘立柱建物

今回の調査で掘立柱建物として、まとまったのはSB-1～SB-4の4棟である。概要で既に述べた様に、埋土・形状・深さに固執して現地での確認だけで机上の確認は行っていない事を再度お断わりしたい。ただ調査区内に多数のpitが検出され、その中には柱痕を持つものもあり、まとめきれない建物も多いと考えられる。

SB-1 (Fig. 3, PL. 2)

南東部の掘方の一部と南東隅の掘方が調査区外へのびているが、2間×5間の南北棟建物と考えられる。柱の掘り形は隅丸長方形 pit51・29・43・47あるいは隅丸方形 pit50・46・43の掘り形の間に楕円形の掘り形を呈したものを配置している。深さは pit43の30cmと pit46の35cmをのぞけば、他は40～50cmを測る。また pit50・28・51・49・48・47・29・46・43・45には径25～35cmの柱痕跡が認められ、さらに pit50・51・49・48・47・43の掘り形には足場杭の先端部径10cm前後のものが長さ15～25cm遺存していた。梁行の北側の心心距離は2.1m、2.4mで北側中間柱はやや西に位置する。東側桁行の柱列の心心距離は北から1.8m、1.5m、1.8m、2.4mと異なっている。西側柱列は1.8m、1.5m、2.1m、1.8m、1.5mとやはり一定はしていない。方位はN-2°40'-W（真北）である。すべての掘方から遺物は全く出土していない。

SB-2 (Fig. 4, PL. 2)

調査区の西側で検出された2間×5間の南北棟建物である。方位はN-3°20'-W（真北）にとり、南北梁の実長4.5m南北桁行の実長10.4mを測り、長方形のプランをなす。南北中間柱はともに西側による。柱掘り形は pit 8が隅丸長方形、pit79・2が楕円形で他は径60cm前後の不整円形を呈する。掘り形は遺存状況が悪く、深さ20～25cm前後である。しかし径20cm前後の柱痕跡は全てのpitにおいて明瞭に見られた。北側梁行の柱列心心距離は東から2.1m、2.4m、南側梁行では同様に2.1m、2.4mを測る。東側桁行柱列は、北から2.1m、1.9m、1.9m、2.1m、2.4mとなり、西側では2.1m、1.9m、2.2m、2.1m、2.1mで一定はしない。遺物は少量だが pit19・4・21・8・38から出土している。遺物 (Fig. 5・1～5) は、かろうじて図示できるもので、いずれもpit上層からの出土。Fig. 5・6はpit中層からの出土で、この掘立柱建物の時期判定する唯一の資料であろう。

出土遺物 (Fig. 5・1～6, PL. 4)

1は弥生時代の鋤先口縁の口縁部片で内外面ともにローリングを受け器表はあれている。胎土には少量の細砂粒が含まれているが焼成は良好である。内外共に褐色を呈す。pit4出土。
2・3・4は土師器の甕の口縁部で、3・4は1と同様、ローリングのため器表があれている。ともに焼成は良好で、胎土も精製されている。2は外面に煤が付着し、内面は淡橙色で指頭整形の後ナデ調整を施す。pit21より出土。3はpit19の上面より出土したもので、外面頸部付近

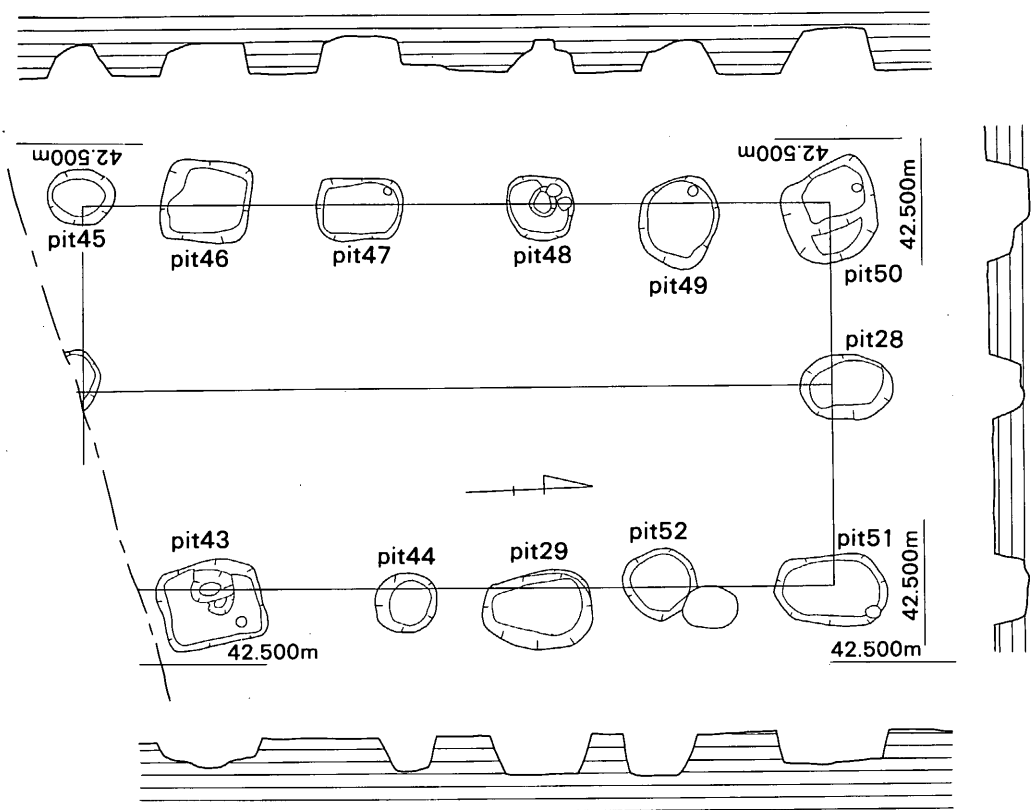


Fig. 3 SB-1 実測図 (S1/90)

に指頭痕がウッスラ残り、内外面共に淡茶褐色を呈している。4はpit8出土のもので内外面ともに淡茶褐色を呈す。調整は外面は指頭整形後にナデが施されている。5は須恵器の無頸壺の口縁部で胎土も精良で焼成も堅緻である。6はpit19出土の須恵器の蓋で口径14.6cm、器高3.3cmを測り、内面に身受けの返りを有する。外天井部は回転ヘラ削り調整を行ない、内面はナデ調整で仕上げている。胎土には若干の細砂粒を含み、焼成は普通である。

SB-3 (Fig. 6, PL. 2)

調査区の最西部で検出されたもので2間×3間以上の南北棟建物と考えられる。北・西側が未調査のため詳細は明確でない。しかし北側の耕作土剥土の時に同様な形状・埋土をもつ大きなpitの存在を確認しており、未調査区西北部に同様な建物の存在の可能性がある興味もたれる。pit87に切られるpit96は、Fig. 7での断面図で示めされる様に径30cm前後の主柱をもち、南北に径10cm前後の副柱をもっている。pit94・95・97は床面が平坦になってしまっているが(湧水のため、何度も底面をさらえ直した)、本来的にはpit96かpit35同様の底面形をなすものであった可能性が強い。これらの大型のpitの埋土は、いずれも同様な埋土状況であった。なおpit93・35についても同様な埋土の堆積状況を確認している。当初pit94を土層観察した

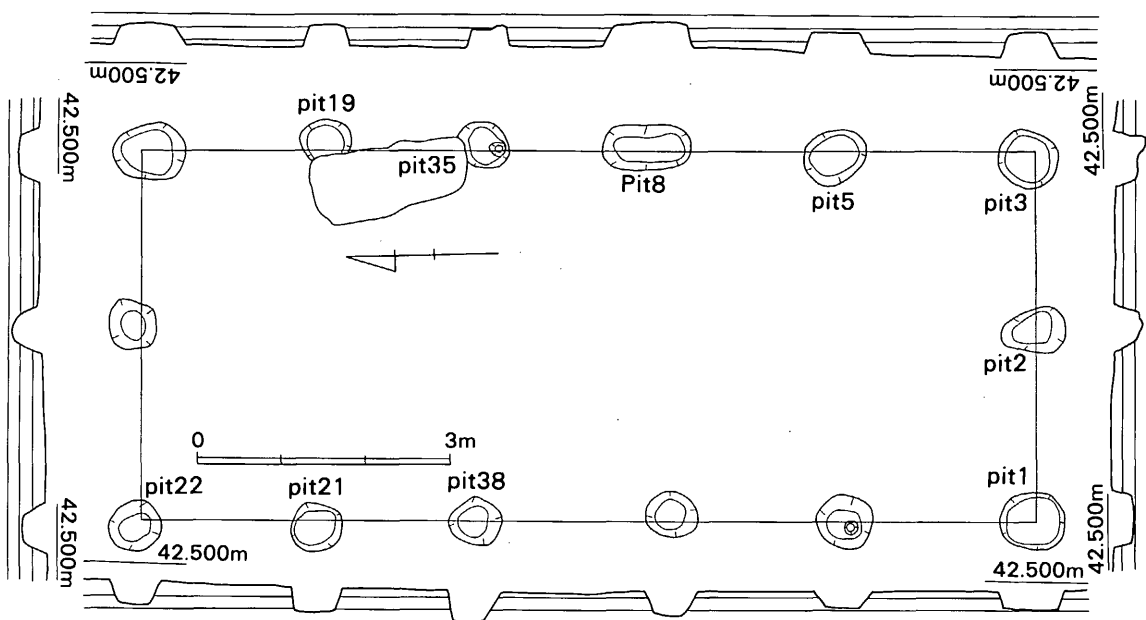


Fig. 4 SB-2 実測図 (S1/90)

時には、横断の位置が悪くしかも軽率に掘り下げてしまったが、この反省が pit96での成果につながったのは幸いであった。柱穴は pit 7 が隅丸方形だが他は隅丸長方形で深さは60~70cmを測る。今回の調査地点では径20cm前後の柱痕跡の認められるものが数多くあった。このSB-3の柱痕跡は25~30cm前後で、他の柱痕跡より類をぬいて大きいというのではない。しかも柱痕跡の遺存する pit 7 と pit96の心心距離は2.4mで他の建物と比較してもさほど大きいものではない。しかしながら柱穴の掘り形は群をぬき足場杭ではなく、副柱的なものまであり、この建物の意味づけ・性格づけがおおきく問題となろう。方位はN-2°-W (真北) である。pit96が pit87によって切られており、おそくとも SB-4 の建物が構築された時期には、この建物は明らかに廃絶していたと考えられる。これらの pit のいずれからも時期判定のできる遺物の出土はない。ただ前述のように埋土状況が同一であると思われる pit35から推察するならば、pit35は7世紀後半の須恵器蓋を有する pit 19を切っており、おそくとも7世紀後半以降の構築物である可能性も考えられる。

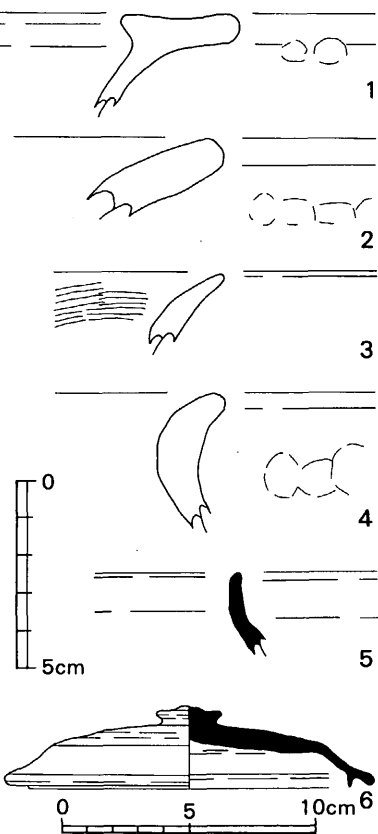


Fig. 5 SB-2 出土土器 (S1/2・1/3)

SB-4 (Fig. 6, PL. 2)

SB-3と同様に調査区の西端部で検出した建物で、SB-3と重複している。建物の大部分が西側の調査区外へのびているため明らかではないが2間×2間以上の東西棟建物と考えられる。柱掘り形は径70cm前後の不整円と50×70cmの楕円形および径1m前後を測るpit39があり、形状は必ずしも一定していない。さらにpit39の場合底面は段差があったりして、他のpitと重複している可能性も含まれている。掘り形の深さは40cm前後を測り、方位はN-3°-W（真北）である。東側梁行のpit87・88・39・91と南側桁行のpit89には柱痕跡が明瞭にのこる。これらの心点距離は1.8m、2.1m、1.8m、そして2.1mを測る。

調査地点は鏡山猛氏の推定条坊域^{註1}からは僅かにはずれるが、前述した様に検出された建物跡の柱列は主軸をほぼ南北方向にとっていて、大宰府条坊跡に関連の深い遺構と思われる。

註1 「大宰府都城の研究」 1968 鏡山猛

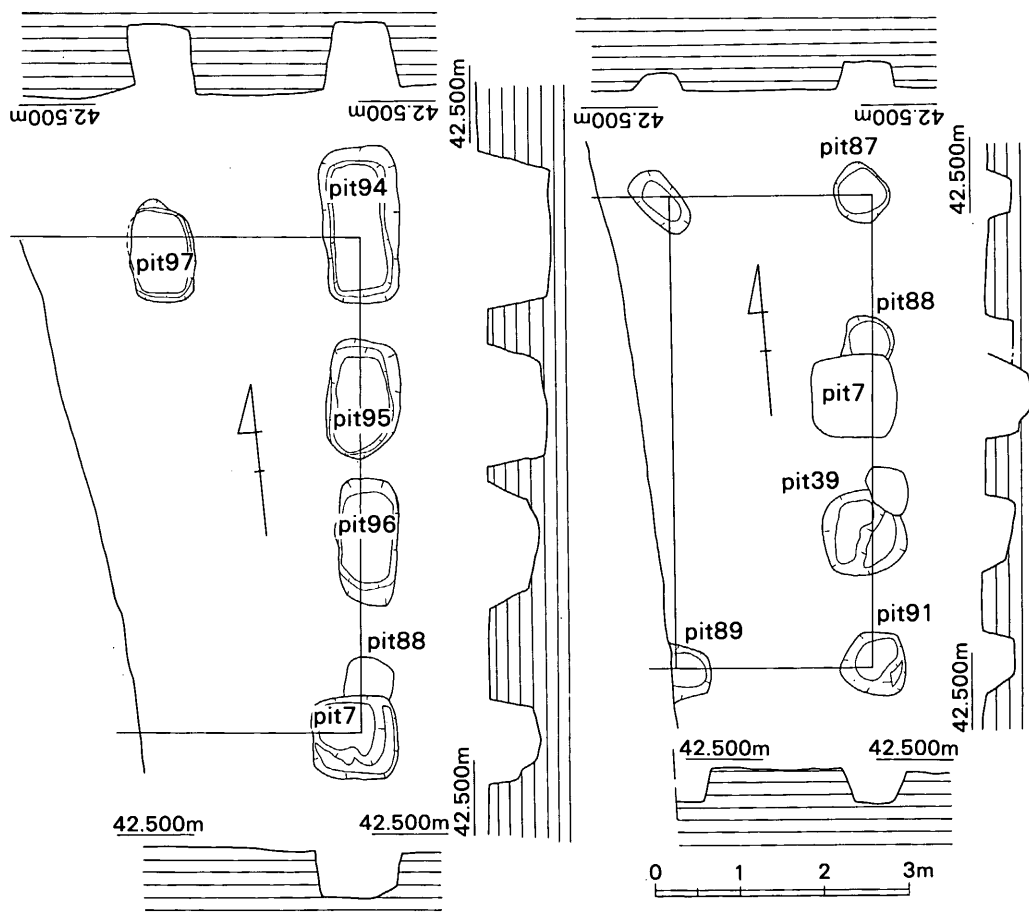


Fig. 6 SB-3・4実測図 (S1/90)

掘方断面図 (Fig. 7, PL. 3)

調査概要で述べた様に柱痕跡の認められるものは全て土層断面図を作成し、埋土状況を比較しながら建物としてのまとまりを把握することに固執した。このため建物方向から、はずれたりしたものもあるので、一応の結果として改めてここで図示した。

pit51はSB-1に伴う掘方、pit21・1はSB-2にpit96はSB-3のものである。総体的に柱痕跡はSB-3のpit96をのぞけば径10~20cm前後を測る。掘方埋土の層序は単一層ではなく2ないし4層に分れている。掘方の深さもpit87以外は20~40cm前後と遺存は良いとはいえない。また柱痕跡も長さ5cm~20cm前後のものが多い。これは近接している条坊第103次の遺構のあり方からも窺うことができ、この周辺での旧地形の移りかわりを如実に示めしていると思われる。SB-1のpit50・51・49・48・47・43には建物の外方向に1~2本の足場杭が遺存していたが、遺存状況が極めて悪く図示できない。現地での取りあげの際の所見だけを記述すると、いずれの杭も径10cm前後、遺存は長さ10cm~15cmで、芯持ち丸太材と考えられる。自然樹木の樹皮を残したものに先端部のみ加工を施して尖らせている。加工は切断後に2方向からの丁寧な削りを施したものである。

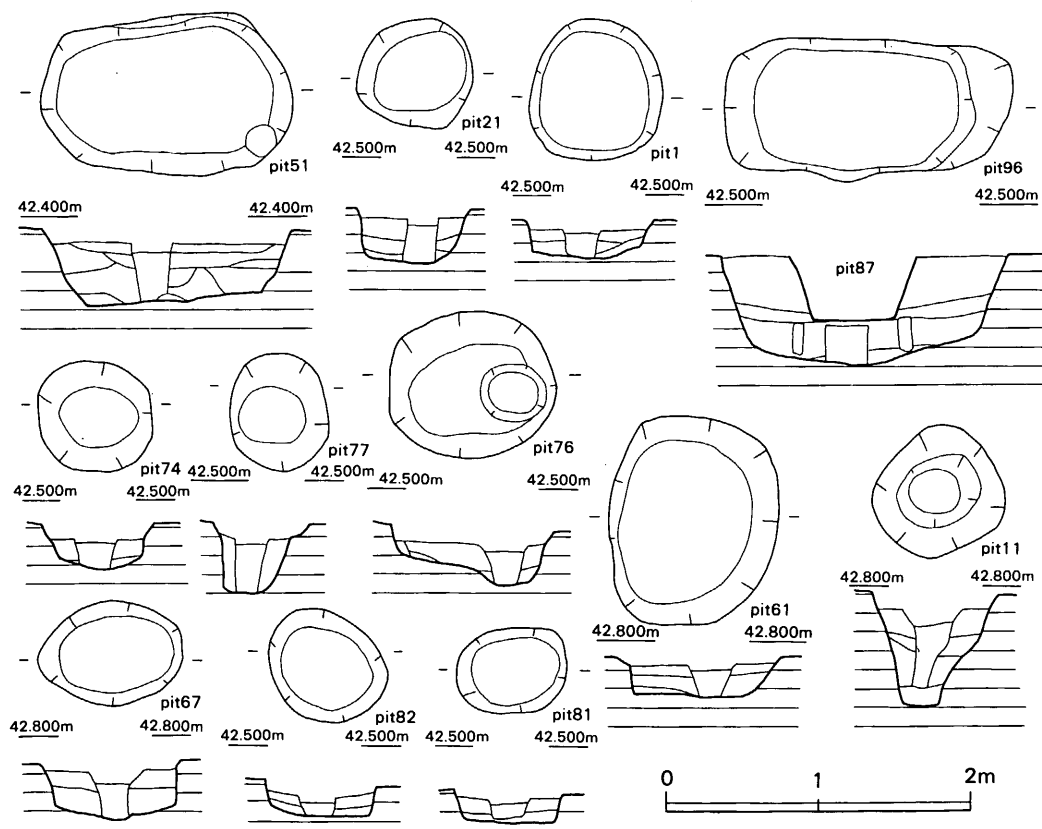


Fig. 7 掘方断面図 (S1/40)

2. その他の pit

pit は総数677を検出した。掘方断面でも述べたように柱痕跡が明瞭に残っているものは多く110を数える。概要でも述べた様に、SD-1 をはさんで調査区の東側はかなり削平をうけている。このことは東側に径の小さな pit が数多くあることで示めされる。しかし中でも pit83 (Fig. 8, PL. 3) のように杭が遺存したものもある。pit83の杭は現存長40cm、最大径20cmの芯持ちの樹木を使用したもので、先端部は4方向からの粗削りによって雑な加工を施す。先端部は打ちこまれた時のつぶれが認められる。本体部は面取りの加工など加えず枝を落しただけのもので部分的に樹皮を残している。また pit59 (付図) は、形状隅丸長方形を呈し、100cm×52cm、深さ50cmの掘方であるが、径20cm前後の柱痕跡の横に径5cm程の杭が遺存していた。これはSB-1の足場杭の遺存状況とは若干の違いを見せる。pitの中層部から底面より10cm上部に斜めに立っていた。杭はいままでのもと同様芯持ち丸太杭だがSB-1やpit83に比べると細い。樹皮を残し、先端部の加工に2～3方向の削りで先を尖らせたものを使用している。またこのpitの周辺にも掘方がしっかりして、柱痕跡の残るpitがあるが建物としてはまとまらない。さらにpitの形状・埋土・深さを度外視して建物跡をまとめるならば pit112・62・111・116・115・114 (付図) で2間×2間の正方形の建物跡となり、同様に pit103・104・105・106・107・108・109・110では1間×3間か1間×2間となる。また pit98・31・17・99・100・101・102もトレンチ内に小さなpitが存在することから1間×4間もしくは1間×3間としてまとめられる。しかしながら心心間の距離を計測すると北側梁行の pit112と113が1.5m、113と114間が1.6mを測るが、南側梁行の pit111と116間には中間柱が見当らず、実長2.6mとやや変則的な正方形プランを呈する。次に pit103と104間は2.4m、pit104と105間は2.6m、pit105と106間は1.7mと心心距離にバラツキがあり一定していない。このため間口が広かったり、狭かったりとはやはり変則的なものになる。次に1間×4間もしくは1間×3間の可能性をもつ建物だが南北の梁行間は3.2mで、西側桁行にあたるpit98と31では2.4m、pit31と17は2.4m、pit17と99の間は2.7m、pit99と100では2.4mとなり間口の広い長方形プランにしかまとまらない。以上の様な結果しか見いだせず、しかもいずれにも東西に広がる様相はない。先に述べた様に掘方の埋土・大きさ・深さ形状など度外視している事からも、建物跡としての可能性をもってはいるものの、今回の調査では建物跡として扱わなかったが、類例をまって改めて考えてみたい。

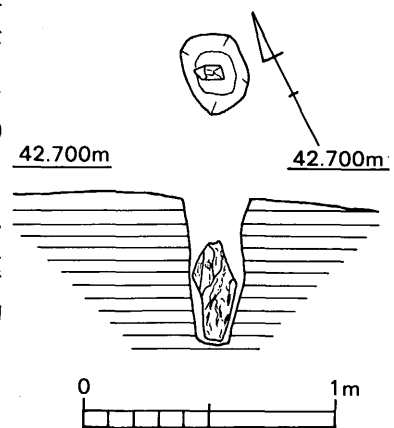


Fig. 8 pit83杭遺存状況実測図(S 1/30)

その他の pit 出土土器 (Fig. 9, PL. 4)

6は弥生中期の甕の口縁部片である。ローリングのため器表は剥落している。胎土には細砂粒が多く含まれるが焼成は良好。pit31の埋土からの出土である。須恵器の蓋の返りの小片である7は、内外共に淡茶褐色を呈す。胎土には少量の細砂粒が含まれるが、ナデ調整によって丁寧に仕上げられている。pit31出土。8はpit9出土の甕の口縁部片。ローリングのため器表があれているが外面に粗いハケ目調整が施されている。内面は指頭痕をウッスラ残す部分もあるがナデ調整によって仕上げられている。胎土には時折3～5mmの石英粒と雲母片が混じり、焼成は普通である。口縁部に最大径が有り、頸部から口縁部は緩やかに外反、頸部付近に頸部と口縁部接合の際の粘土貼り付け痕が残る、丁寧なナデはなされていない。内外面共に淡褐色。9は焼成良好な脚付鉢あるいは台付盤と考えられるもので厚手。外面の調整は丁寧。10は淡小豆色を呈する須恵器杯。口径13.4cm、器高3.3cmの完形品である。外底面にヘラ記号が認められる。内外面ともにナデ調整を施す。9・10ともにpit31出土。11は甕の口縁部片、砂粒が僅かに含まれるが焼成は良好内外ともに灰黒色で堅緻。pit13出土である。12・13はpit35出土のもの。12は土師器の甕の口縁部で内面は器表剥落しているが、部分的にナデ調整の痕跡が認められる。外面は煤が多量に付着。13は胎土の精製された蓋のかえりの小片で、内外ともに灰色を呈し、かえりが口縁端部より僅かに中にはいつている。14は内外共に淡茶褐色を呈す。内面は丁寧なナデ調整が施されるが、外面は器表剥落のため調整不明。かえりの部分が口縁端面より下方に突出する。pit11よりの出土。15はつまみつきの蓋。胎土は細砂粒を僅かに含んで焼成はふつうである。復原口径13.3cmを測る。かえりが口縁端部よりも内側へ後退する。天井部と体部の境は、明確な稜線をなすものではなく、やや不明瞭。14と同様にpit11出土である。

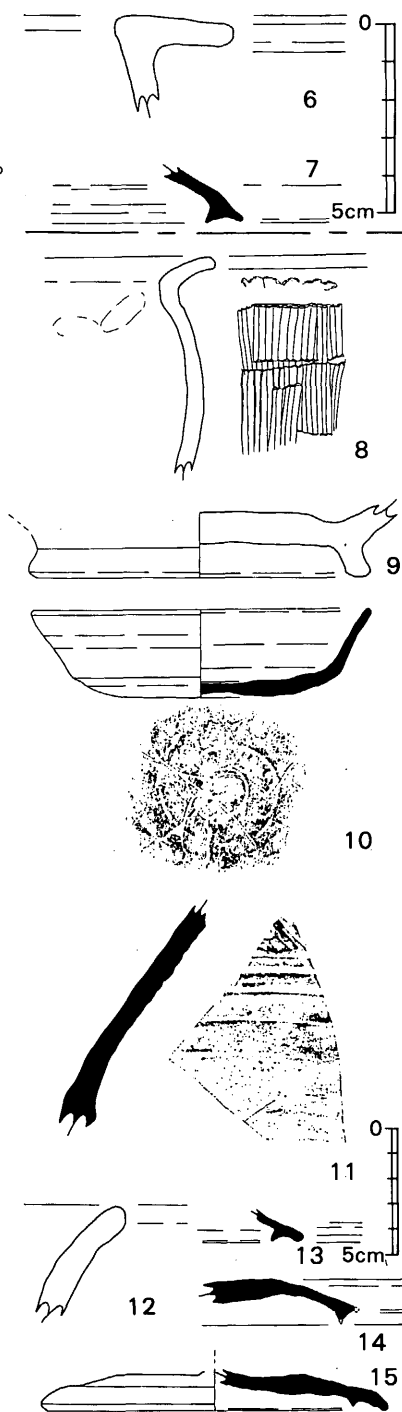


Fig. 9 その他の pit 出土土器 (S1/2・1/3)

3. 柵 (Fig. 10)

SB-1 の西側に位置する南北方向の柵である。SB-1 の建物跡に平行するが、建物より北側に 1 間のびている。現況検出規模は 4 間。柱掘り形は pit118・121 がやや不整楕円形で他の 117・119・120 は不整円形と、大きさも径 30~45cm、深さ 15~30cm とバラツキがあり一定しない。柱間寸法は pit117 と 118 間が 2.7m、pit118 と 119 も 2.7m、pit119 と 120 が 2.2m、pit120 と 121 間が 2.4m を測り、やはり一定しない。柱筋もいく分不揃いである。SB-1 に平行して検出されたが、SB-1 桁行との間は 0.9m と狭く、北側に 1 間分のびていることを考慮すれば、SB-1 と同一時期につくられたとは考え難い。

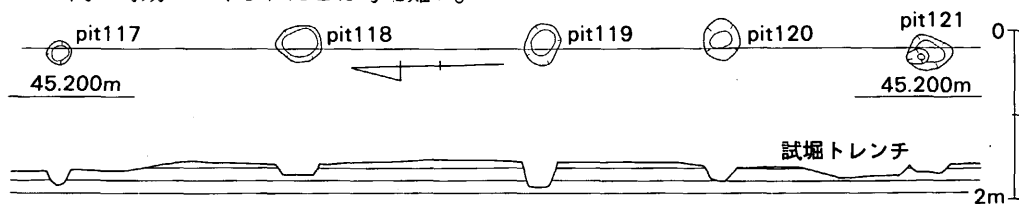


Fig. 10 柵列実測図 (S 1/90)

4. 溝 (付図)

SD-1 は調査区の中央部よりやや西側で検出した N-25°-W に方位をとる溝状遺構である。SD-7 に切られ幅 20~30cm で深さ 25cm を測り、断面は U 字形を呈す。調査区を縦断し、調査区外へのびている。埋土は単一。SD-2 は SD-3 と pit69 に切られる。埋土は単一土層。SD-3 は、調査区の西南部で検出された、断面 U 字状の浅い溝状遺構で pit122 に切られ、途切れ途切れだが西側の未調査区に続く可能性をもつ。N-81°-W に方位をとる。SD-4 は N-128°-W に方位をとる土壌状の溝状遺構で断面は逆台形を呈す。SD-5 は調査区の北西隅で検出され、pit93 を切って不連続だが西側へのびる可能性をもつ。SD-6 は pit82・81 及び SD-7 に切られる東西の溝状遺構で、pit82 付近で曲って北方向へ走る。さらに未調査区へのびる可能性をもつ。SD-7 は pit94 に切られ、SB-2 の北側梁行に平行するように走る。埋土は暗褐色砂質土の単一埋土で断面は浅い逆台形を呈する。SD-8 は pit13 に切られる幅 10cm 前後、深さ 10cm の U 字形をなす溝状遺構。SD-1 に平行する様に調査区の中央部で検出された。しかしこの溝状遺構は pit13 で一旦途切れるが、北側のほぼ延長線上にのびる溝状遺構である。SD-9 は調査区の東側で検出された溝状遺構で、深さ 15cm 前後を測る。断面 U 字形を呈し、南北方向にのびたものが途中で東側へ曲がり、逆 L 字状となるが東側の未調査区へのびる可能性をもつ。SD-1 を境に調査区の東側が削平を受けていることは先に述べたが、SD-1 は現在の田の畦畔に近い位置にある。以上のように検出された溝状遺構は、すべて浅いもので、途切れて完結したものが多く連続するものが少ない。

出土土器 (Fig. 11, PL. 4)

16はSD-6出土の甕の口縁部片である。胎土は精製され、焼成は堅緻。口縁部の断面形は内面端部が突出し、さらに外面端部の上下を突出させる。しかし外面端部の下方は垂下する。突出部の稜はさほど鋭くなく、口唇部は横ナデにより凹面を呈する。17は弥生中期の甕の口縁部で、器表はローリングのため剥落して調整不明。胎土には細砂粒が多量に含まれるが、焼成は良好である。SD-1よりの出土。18は弥生中期の甕の底部片で、復原底径6.6cmを測る。17と同様にローリングのため器表剥落して調整は不明、胎土には少量の細砂粒が含まれるが、焼成は良い。

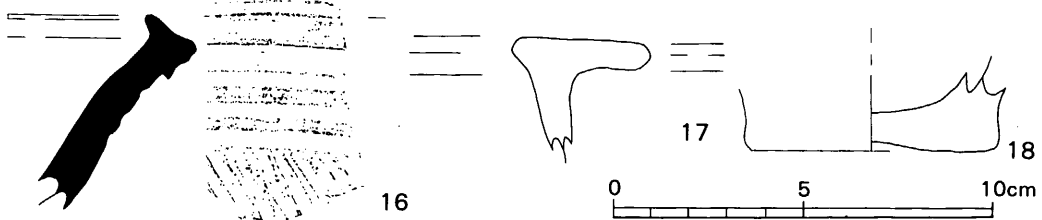


Fig. 11 SD出土土器実測図 (S 1/2)

5. その他の出土遺物 (Fig. 12, PL. 5)

19は黒曜石製の石鏃で先端と基部が欠損している。表・裏面ともに連続的な細かい剥離によって仕上げられている。断面は凸レンズ状をなす。20は脚部の一部が欠損した石鏃で、黒曜石製である。19・20ともに腰岳産のものである。基部の挟りは丁寧な剥離が施されて基部をつくっている。側辺部は表・裏面より大まかな剥離によって刃部を形成している。形状は二等辺三角形で断面は凸レンズ状である。19・20はともに整地層よりの出土。21は調査区の西南隅の整地層から出土した軒丸瓦の瓦当部で、丸瓦部は欠損している。瓦当面径18.1cm、厚さ2.5cmとやや厚い。瓦当部が完形品のため丸瓦の取付は不明である。瓦当文様は周縁に重圈文を配し内区は単弁八葉蓮華文中で中房に蓮子を1+6配置している。弁間に間弁があり、単弁や葉弁のつくりは范の抜けが悪いので全体的に失敗作が多く、一部分を粘土で補足している。しかも周縁上部に范抜き後、外から圧力が加わったのか全体に内傾していて、さらに文様のいたむ部分や周縁端部は、整形後あとで手を加えて仕上げています。粘土は少量の砂粒が混じるが、焼きあがりはやや軟質、色調は褐色で部分的に焼成時の熱作用により、赤褐色を呈する。外面には斜格子叩きのタタキ痕が認められ、このタタキ痕は一周する。これは瓦が一本づくりである可能性を示めている。瓦当裏面の下半部周縁は2cm前後の幅で堤状に高くつくられ、面調整を押圧、ナデによって施している。裏面の調整は押圧と横方向のナデによるものだけで粗雑である。端部は部分的にケズリによる面取りがなされている。裏面の支持土は部分的に剥離している所もあるが厚い部分も認められる。しかし支持土の厚い部分は丸瓦取付範囲に限定されている。鏡板、周縁部は丁寧なナデで成形されている。現段階では瓦当部の完存する唯一の資料である。

22は須恵器・高坏の脚部で裾部復原径10.8cm、現存器高4.5cmを測る。器表はローリングのため調整は不明。胎土は細砂粒が少量含まれて、焼成はやや軟質。内外ともに白灰色を呈する。裾端部はやや右上がりの下面より外側上方にはねあげておさめる。内面にはウッスラしぼり痕が残リナデ調整を施している。23は円盤状土製品である。器種は不明だが、焼成の良好な土師器の再加工作品で、周縁部を打ち欠いて円形に整えているが削りは施していない。若干不整円で径3cm前後、厚さ0.6cmで、表面は淡橙色、裏面は淡白褐色を呈す。24は須恵器。小型の甕の口縁部である。ローリングにより器表がややあれているため調整は不明瞭。胎土には僅かに砂粒が混じり、焼成もやや軟質。口縁部の断面は、端部外側の上・下を横に突出させる。しかし突出部の稜線はにぶく、やや丸みをもっておさめる。内外共に淡黒灰色を呈している。25は弥生中期の甕の底部片である。底外面は中心に向かって僅かに凹む。ローリングのため器表が剥落して調整は不明。復原底径7.4cmを測る。胎土には多量の細砂粒が含まれているが焼成は良好である。外面橙色、内面は淡黒褐色を呈している。26は白磁碗の口縁部片。胎土は黒色粒を僅かに含むが、白色でやや粗い。釉は黄白色でやわらかい光沢がある。施釉は内面は胴部下位にあり、口縁部付近は露胎する。27は須恵器・高坏の脚部で、胎土は精製されるが焼成がやや軟質。外面黒灰色、内面白灰色を呈する。脚部端部は内側に屈折し、やや丸くおさめている。

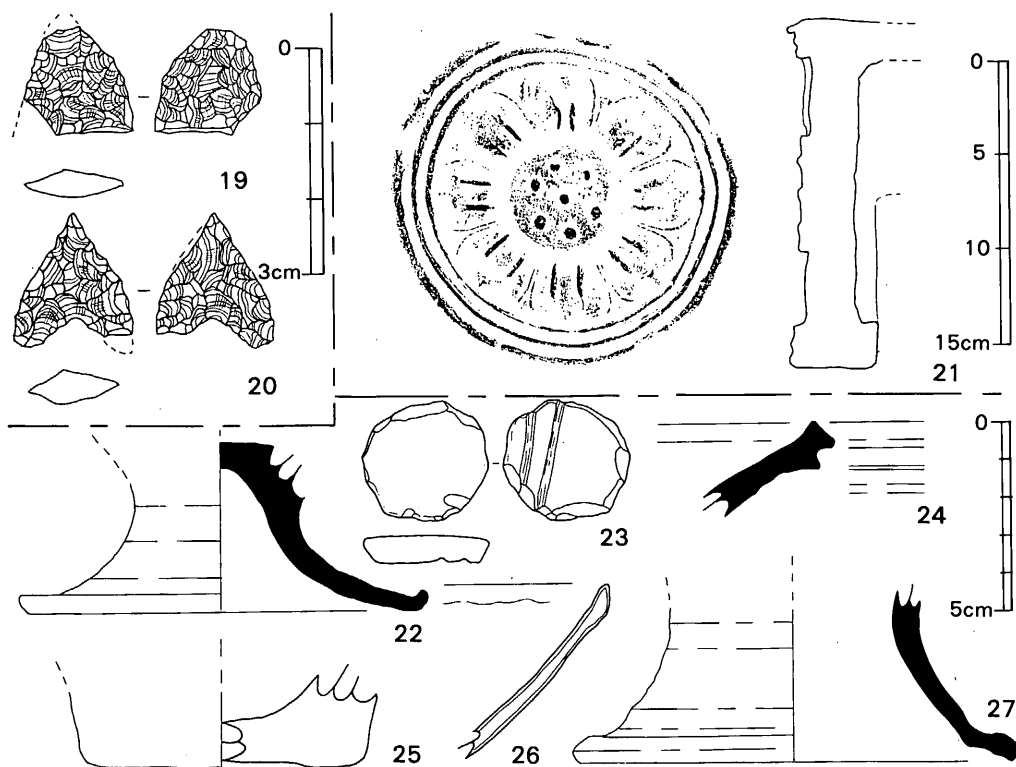


Fig. 12 その他の出土遺物実測図 (S1/1・1/2・1/4)

IV. ま と め

今回の調査地点は、塔原廃寺跡の心礎がある所より東へ210mの所に位置する。このため塔原廃寺跡と関連性のある遺構の存在が期待された。しかし塔原廃寺跡と直接的な関係をもつ遺構の検出は皆無であった。しかしながら推定条坊域外とはいえ、ほぼ真北をむく建物跡の存在することなど興味深いものがある。この段階で問題点の考察を行なうのは推論にしかなりえないので調査で問題となった事項をとりあげて、まとめにかえたい。

検出された建物跡は全てが掘立柱建物であり、その建物は主軸をほぼ真北にとる。特にSB-3については触れる必要がある。未掘部分があるとはいえ、土壌状の大きなpitには注目せねばならない。柱痕跡は30cm前後とさほど大きくない柱を使用しているにもかかわらず、径10cm前後の2本の副柱を持ち、この様な大きな掘方が掘られている点である。なぜこの様な大きな掘方と副柱が必要であったのだろうか。時期的なものを度外視していけば、私の調査した隈・西小田遺跡第13地点の際束式高床建築物と呼ばれているものに類似点を見いだせる。しかし隈・西小田遺跡の建物は弥生時代であり、弥生時代・古墳時代と時の流れによって新しい建築技術の普及もあり、この技法が継承されていたか否かは不明で建物の構造、技法については建築の専門の先生方におまかせしたい。またこの建物が大宰府政庁から2.2km（直線距離）と離れた場所にもかかわらず存在する意味は何か不明である。建物跡の時期は遺物が、ほとんどのために明確でないことは既に掘立柱の項で述べた。SB-2は柱穴埋土から出土した土器から7世紀後半に位置づけられる。しかし他の建物跡に伴う遺物の出土がないが、調査地点全域出土の土器は7世紀後半から8世紀前半に位置づけられるものが多い。近接する条坊跡第103次調査^{註1}においても層序・時期は不明だが柱列の主軸をほぼ南北にとる掘立柱建物跡が、1棟検出されている。両地点における遺構の存在は、ともに建物群の一部を垣間見たにすぎないが、この103次調査と136次調査地区に政庁第Ⅱ期の完成期前後に何らかの施設が存在していた可能性が示めされている。

次に整地層と考えた土層と遺構の埋土状況についてであるが、調査地点における層序は耕作土・床土・灰褐色砂質土（整地層）・灰黒色砂質土（地山）で、塔原廃寺跡^{註2}の調査で確認された層序と類似点を見い出せる。塔原廃寺跡でも耕作土・黒褐色混砂土層（遺物包含層）として捉えていて、遺構の検出面はこの遺物包含層か、もしくはその下面となっている。このことは時期差のある遺構の存在を示めす。ここで瓦溜として扱われている遺構の埋土は包含層となっている。これは、第136次調査の整地層が、かなり削平されている部分もあるとはいえ、遺構の埋土は同様なあり方を示めている。したがって両地点の遺構は同時期に存在した可能性をもっている。

註1. 大宰府条坊跡 第103次発掘調査 第29集 筑紫野市教育委員会

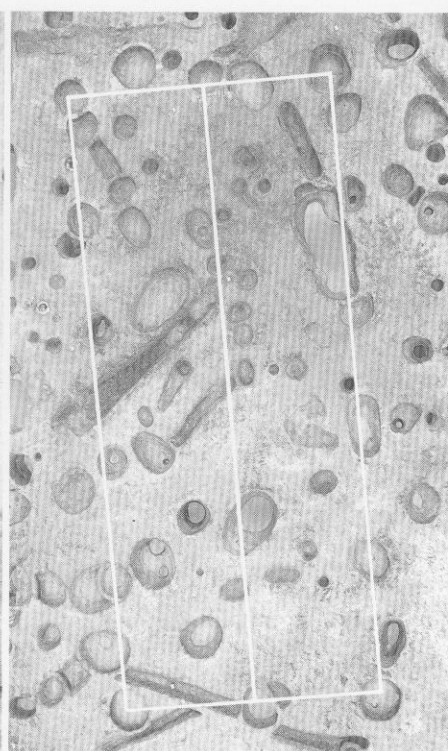
註2. 塔原廃寺 福岡県文化財調査報告書 第35集 福岡県教育委員会

版 圖

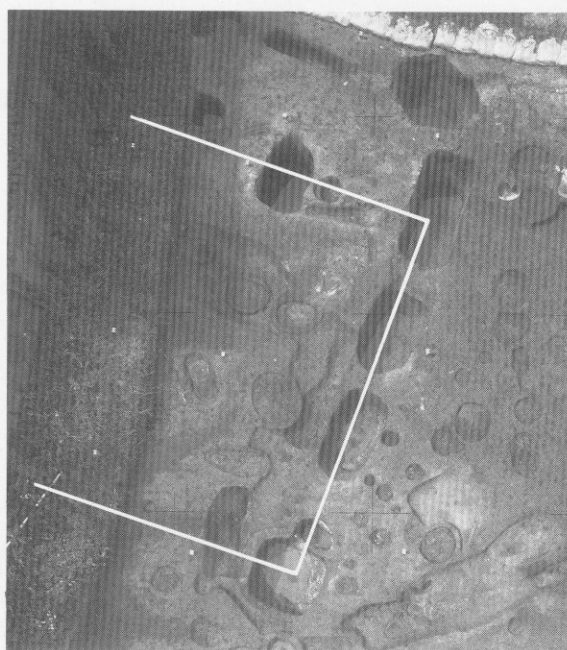




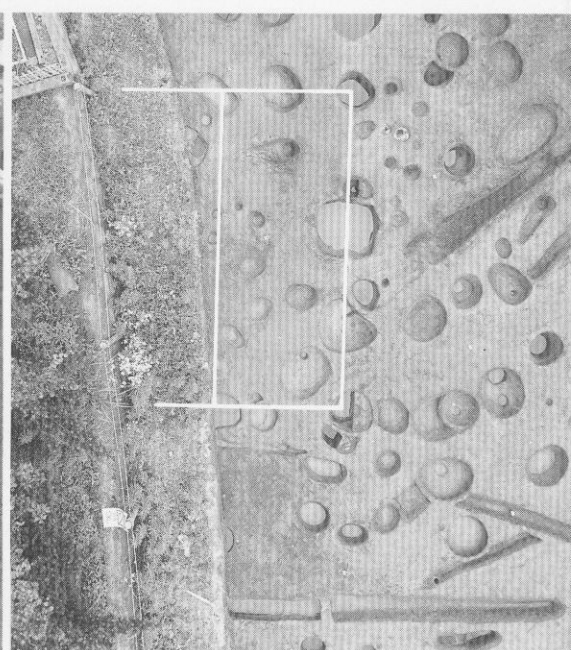
SB-1



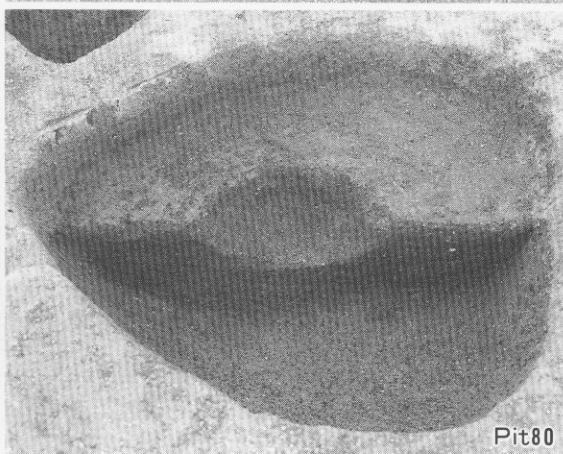
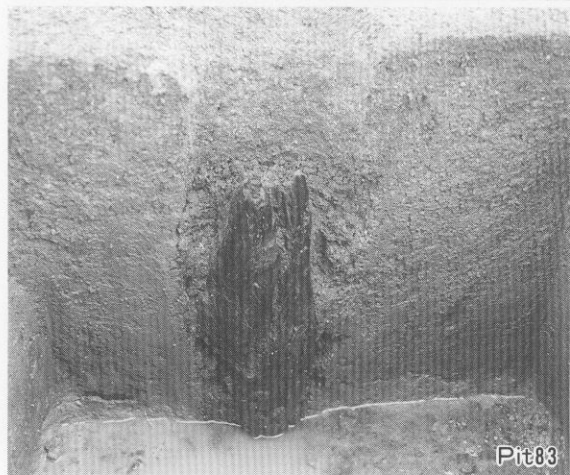
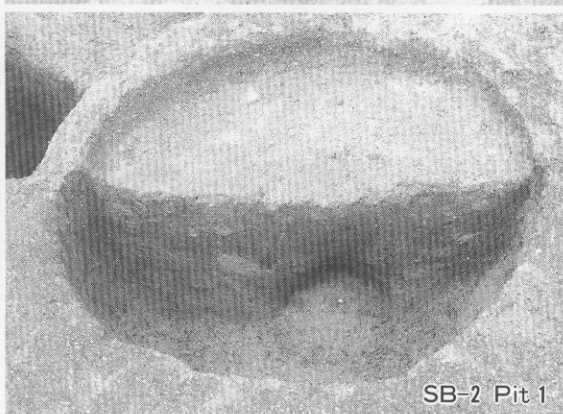
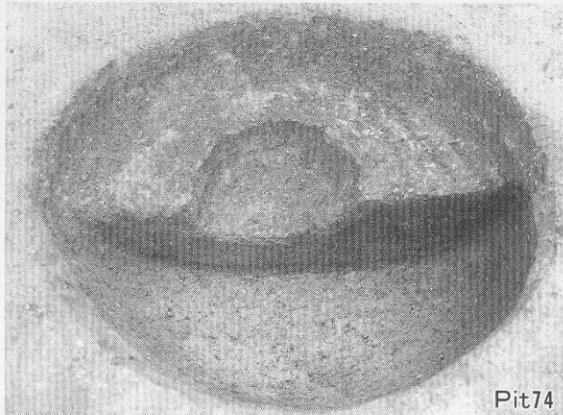
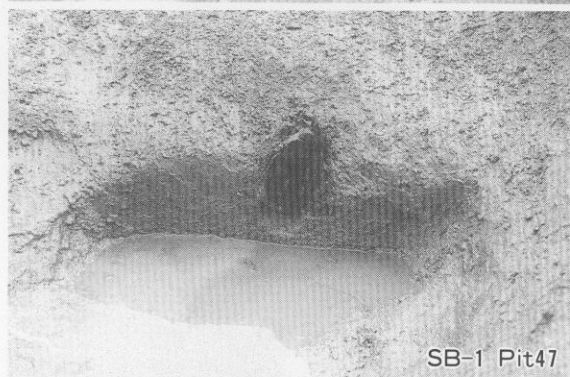
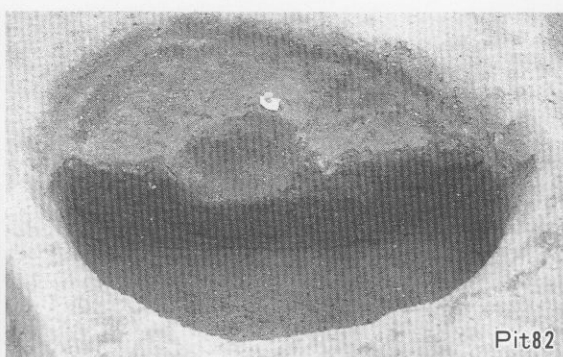
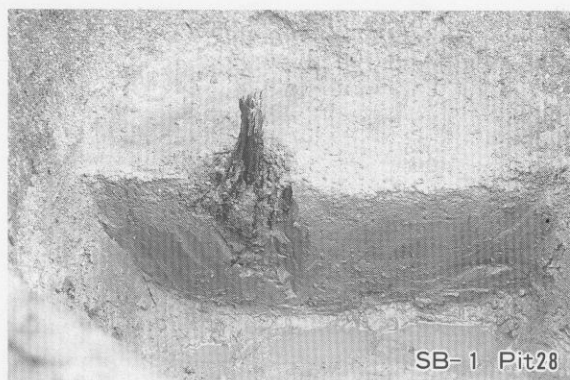
SB-2

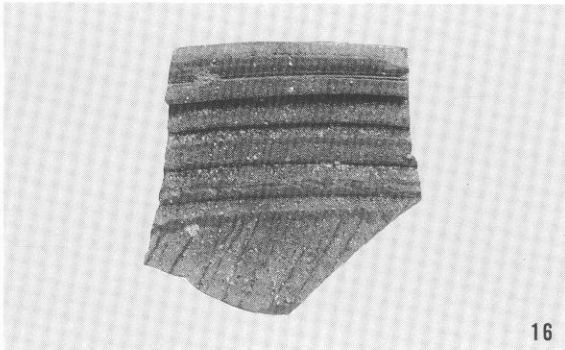
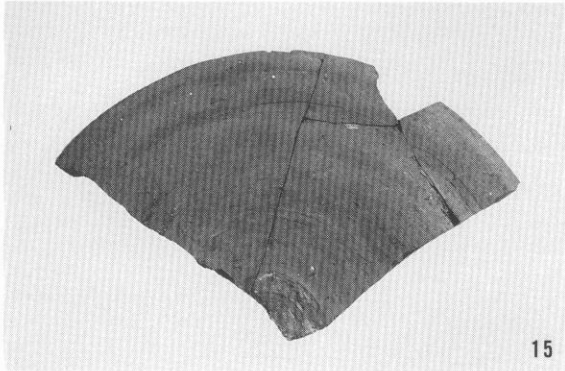
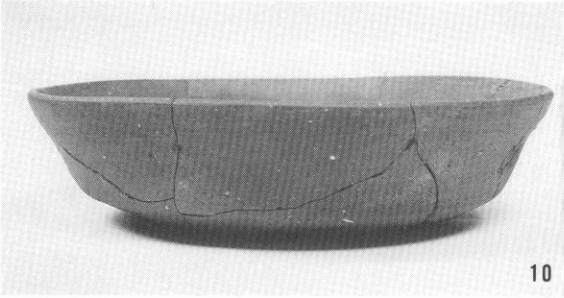
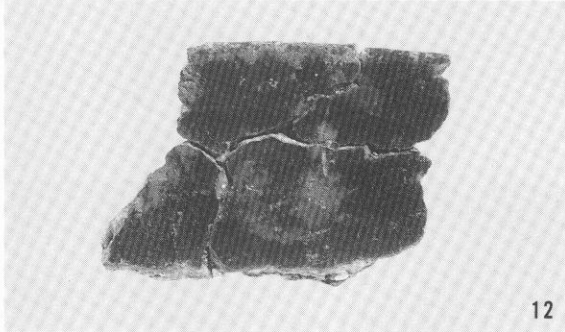
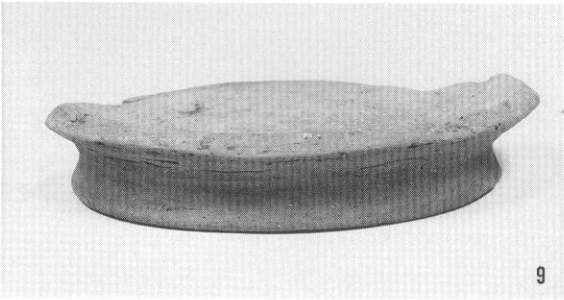
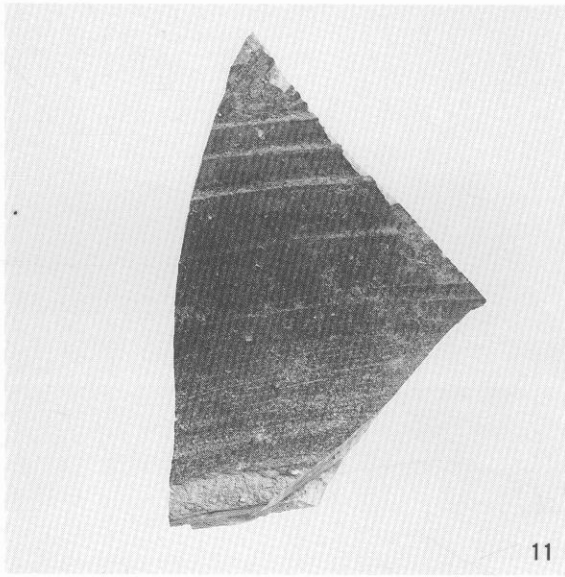
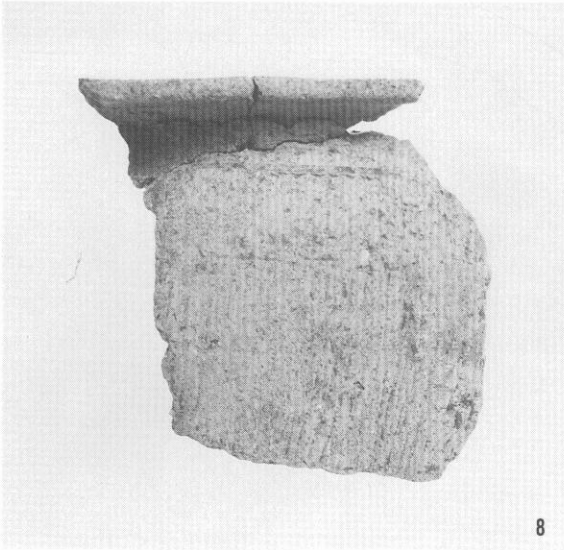


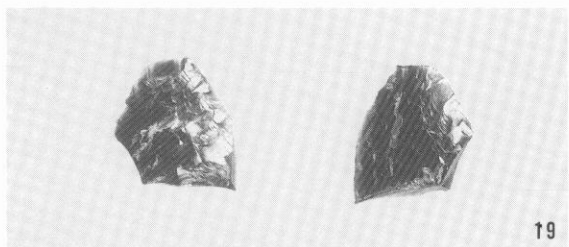
SB-3



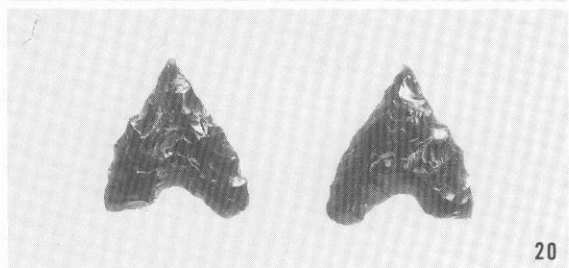
SB-4



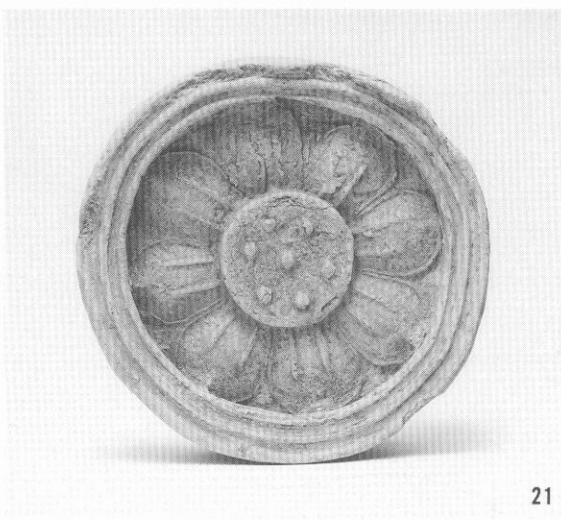




19



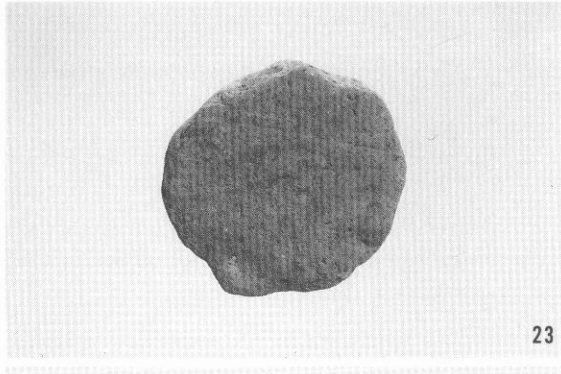
20



21



22



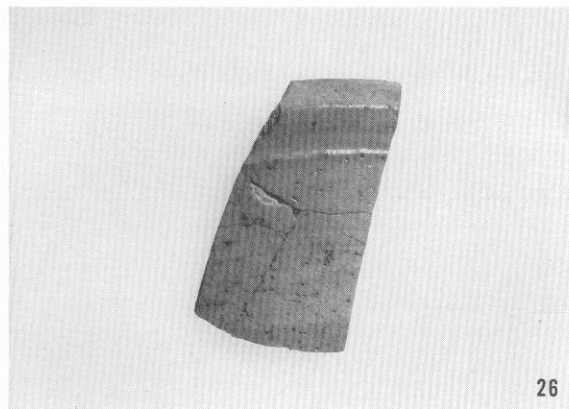
23



24



25



26



27

大宰府条坊跡

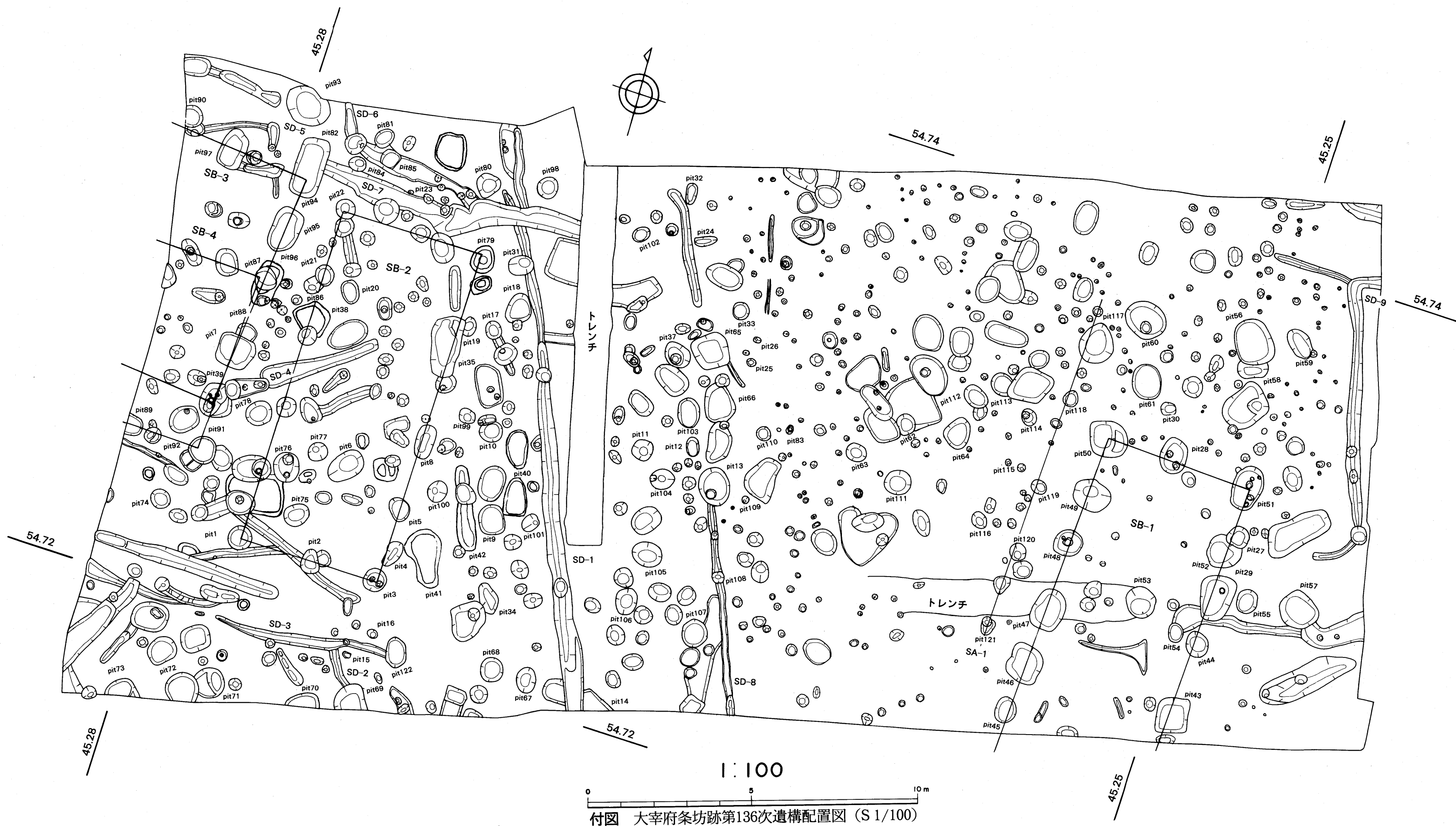
第136次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第42集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目6-41



付図 大宰府条坊跡第136次遺構配置図 (S 1/100)